

# 「社会とつながるイルカ 研究」

## イルカ研究は私たち人間 につながる

### 鯨類研究に最適な三重大学

私は大学に来たらすぐに双眼鏡を持ち出し、6階の研究室の窓から5分間だけ海を眺めます。中部国際空港を望む目の前の伊勢湾に一瞬だけひょこっと現れる灰白色や鉛色の背中を見つけると、うれしくなります。小型の鯨類であるスナメリです。大学の校舎からは双眼鏡で、大学の目の前の町屋海岸まで歩けば裸眼で、スナメリを見ることができます。伊勢湾湾口にはマイルカ（ハセイルカ）、熊野灘にはマッコウクジラなど大型の鯨類にも会うことができます。また、珍しい鯨類を多数飼育している鳥羽水族館や名古屋港水族館と学術交流協定を結んでおり、水族館でも鯨類の研究をさせていただける環境が整っています。三重大学は、このように野生・飼育を問わず鯨類を研究するのに最適な大学だと思っています。



研究室から撮影したスナメリ (真ん中の黒いもの おそらく2頭)

### イルカの多様な生き方とコミュニケーション

さて、鯨類の中で小型のものをイルカと慣習的に呼んでいますが、種類によって本当にいろんな生き方をしています。濁ったガンジス川に生息するガンジスカマイルカは目が退化していることもあり、みんなわりと近くで泳いでいるのに一緒に並んで泳ぐことはしません。同様にスナメリも、親子を除きあまり他の個体と一緒に泳ぐことは少ないです。ところが長年観察をしているミナミハンドウイルカという種類は、いつも他個体と連れ立って泳いでおり、個体間でのコミュニケーションも多様で、触り合ったり、声を掛け合ったりしています。私はこのようなイルカの多様な生き方の違いに興味を持ち、様々な種類のイルカ同士の音や行動を用いたやり取りを中心に研究を行ってきました。仲間と連れ立って泳ぐ種類のイルカは、自分の声を出してからおよそ1秒程度のうちに誰かに返事をもらえないと、もう一度自分の声を出すことが多く、私たちの「既読スルー」問題が思い出されておもしろいです。きっとさみしがり屋さんが多いのだと思っています。逆に言えば、「さみしい」という感情は、日常的に群れを作る動物には重要なのでしよう。

### イルカがあくび?

イルカの観察をしていると、目の前でもおもしろい行動に出会うことがあります。伊豆諸島御蔵島で野生のイルカが眠そうに口を大きく開けるところを見たとき、「あくびっぽい」と思いました。でもよく考えたら、私たちのあくびは空気を吸う/吐く必要があり、水中であくびをすることはおかしい。でも、研究室の大学院生だった榎津農子さんが、様々なイルカの観察に加え、系統が違いますが海で暮らすジュゴンの観察も行った結果、みんなあくびっぽい行動をしていることがわかりました。水中であくびをするのだから、あくびという行動にとって空気を吸う/吐くのはそれほど重要ではないのではないかと、というのが私たちの現在の考え方です。このように、私たちが普段している何気ない行動を、イルカを通して深く考えることができるのも、おもしろいところですね。(実は人間のあくびも、よくわからないことがたくさんあるようです。)



御蔵島のミナミハンドウイルカのあくび

### イルカがいなくなる

御蔵島のまわりに160頭程度いたミナミハンドウイルカが3年ほどで110頭程度までに減りました。多くが他の島などに移出したことが、御蔵島観光協会による個体識別調査でわかりましたが、その理由はわかりません。御蔵島では野生のイルカと一緒に泳ぐ「ドルフィンスイム」が行われていますが、その影響の可能性があると仮定し、回数を減らすなどの自主的な制限を強めたことから、個体数は幸い減少から増加に転じました。しかしこのとき、長期に研究をしている私にも現状について説明できることがなく、ちゃんとイルカたちの変化を見つめられる研究をしなくてはならないと強く思いました。そこで、イルカの体の大きさを触らずに測るシステムを作り、何歳でどのくらいの大きさになるか、という成長曲線を作成しました。今後年齢に対して体が小さい個体が多い場合は、環境が悪くなっていることが予測できると期待しています。

### 尾鷲市の海水浴場に出現したイルカをめぐって

2020年に尾鷲市の海水浴場に1頭のイルカが出現し、ダイバーたちに体を当てるようになり、尾鷲市から専門家の意見がほしい、との問い合わせがありました。これまで私はイルカが何をしているのかに興味があり、人との関係性というものは二の次に考えてきたので困りました。しかし実際に海水浴場に行くと、その個体を見たら、たくさん野生のイルカを見て、研究してきた経験から、意外と説明することができました。つまり、野生のイルカはこういう行動をする、ということが、24年間の御蔵島での水中観察により確認できており、それと比較することで、例えば、この尾鷲の個体が生殖器を人に押し付けることをするのは、野外のオス同士でもよく見られる行動であり、そうやって日ごな一日暮らしていたことを観察していたので、普通の行動だろう、ということがわかりました。



尾鷲市の海水浴場に現れたイルカ

### 今度は福井県でも

昨年来、福井県で複数の海水浴場にイルカが出現し、海水浴客が噛まれてけがを負う事例が多く報告されました。海水浴場の閉鎖はせずにイルカに来てもらわないようにするというところこそ、地元の方たちが一番求めていることでした。既に「ピンガー」と呼ばれる、音を出す機械を取り付けて対策していましたが、あまり効果はなかったそうです。他に打つ手を考えなければならず、私たちにできる方法があまりにも少ないことを思い知らされました。理由は不明ですが、このイルカを今年8月に確認した際は大きなけがを尾びれに負っていました。捕殺やストレスをかけるという方法ではなく、持続可能性の高い、イルカの生活と人間活動のすみ分けを実現できるような、イルカの行動を制御する方法があるはずだと信じています。それが実現できれば、世界中で問題になっている混獲、つまり魚などを捕まえる漁網に誤ってイルカがひっかかってしまうことも軽減できるはずです。ぜひみなさんも、私たちと一緒にイルカの様々な問題の解決の方法と、不思議を探ってみませんか？



三重大学大学院生物資源学研究所・教授  
三重大学大学院生物資源学研究所 附属鯨類研究センター・教授

森坂 匡通 MORISAKA, Tadamichi

[URL] <https://kyoin.mie-u.ac.jp/profile/3162.html>

専門分野は動物行動学、生物音響学。イルカの社会やコミュニケーション、保全等に関する研究が現在の課題。趣味は国内外でたくさんのイルカを見ること、フットサル、音楽。博士号取得後、期限付きの職を渡り歩いて今まで6つの大学に所属してきましたが、意外によい経験だったなあと思う今日この頃です。